

図書新聞 思考の隅景 連載 64

『遙かなるノートルダム』と『群を嫌うオットセイ』とのあいだ、あるいは認識の相互侵食
日本はフランスに何を求め、フランスは日本に何を見いだしてきたのか。

「フランスの誘惑・日本の誘惑：交差するまなざし」中央大学文学部50周年記念日仏文学
シンポジウム（2001年3月28 - 30日）より

パリに客死した森有正には、晩年にフランス人の女友達にあてた一連の仏文の書簡がある（二宮正之訳・編）。その最後の一篇（1969年8月12日）で、かれはあるときバッハの「パッサカリア」を聴いて得た直観を語る。それはあたかも《本質的な》あるものが瞬時に音を帯びた面として《偶有化》した「恩寵の一瞬」であり、「普段は感覚による欺瞞を一切うけつけないでいるものが、最もつかの間（fugace）の形で物質化した」姿に、森は《神秘》を感じたと告白する。いうまでもなく、この西欧精神の、より堅固な物質的具現を、森はパリの大聖堂のうちに認め、『遙かなるノートルダム』へと、接近を試みても適わぬ、自分の限界を嘆いてみせた。

その森（1911-76）よりひとまわりを越えて年長の詩人に、金子光晴（1895-1975）がある。その彼がパリに見いだしたのは、腐り行き、崩れ行く退廃の美であり、爛熟のうちに悪臭を放つ文明の奥深さだった。この金子のパリ体験は、一生涯の熟成を経て、ようやく晩年に書き留められた。その『眠れパリ』（1973）に感応したのが、開高健の『夏の闇』（1972）、『ロマネ・コンティ 1935年』（1973）でもあったろうか。「酒、料理、女、機知、明晰さ、寛容さ、個人主義の徹底、知的アナキズムの匂い」、といったお決まりのパリの魅力に酔っていた開高は、「ただし、ときどき、どうにも手に負えぬ醜悪さと腐臭が胸もとにこみあげてくる」のを、当初は苦々しく感じていたようだ。だがやがて、「膿んだり、分泌したり、醗酵したりする」パリという町の疲労と退廃とが、いつ知らず自分の「体のそこかしこに付着した」のを悟る（アンヌ・バイヤール=サカイ）。今橋映子の『異都憧憬』（ちくま文庫）と劉建輝の『魔都・上海』（講談社メチエ）を重ね読みすれば分かるように、金子にとってのパリとは、放浪途上の上海、黄浦江を流れる、腐乱する汚物の記憶で透過されていた。それと同様、開高のパリは、従軍作家のヴェトナム体験、「泥沼の戦争」と表裏になって析出された、70年代欧州のネガでもあったはずだ。

森有正のもとめたフランス精神の高みと、金子光晴から開高健にいたる作家が探り当てた底辺のパリ。その落差と分極の鍵はどこにあるのか。ここで思い出されるのが、ボードレールの言う「現代性」modernitéだ。「現代性、それは移ろいゆくもの、逃げ行くもの fugitive、そして偶発的なものだ。それは芸術の半面であって、残りの半面は永遠である」と詩人は定義した。これを受け、次の世代の詩人マラルメは、現代性が永遠なるものを追放しようとする趨勢を書き留める。その現代性の符牒こそ、当時詩人が友人の画家エドゥアール・マネの制作に見いだした、日本趣味の洗礼だった。そして世紀末ウィーンの文芸評論家、ヘルマン・パーや文筆家ペーター・アルテンベルクは、その日本美術のなかに、西欧の構築志向を掘り

崩し、その弱点を暴露して解体させる「神経の芸術」を見いだすことになるだろう。構築とは無縁の融通自在な「割りつけ」の編集能力とは、また詩人大使ポール・クローデルが、マラルメ詩学の実践と、中国道教哲学を踏まえ、日本芸術の余白の美に見いだした教訓でもあった(渡辺守章)。

認識の主体としての西欧知識人が、《女性》としての日本を、「人形」のように弄びながら、やがてその「人形」によって翻弄され、自らの主体性を蝕まれて抱く、恐怖あるいは退行願望。それはピエール・ロティの『お菊さん』から『秋の日本』への振幅(大久保喬樹)、小泉八雲を経由し、はては文楽の「黒子」に驚嘆し、人形遣いに「身体の模倣ではなく、その感覚的な抽象」を見たロラン・バルトや、東方・日本に西欧理性の臨界点を験したミシェル・フーコーにまで、連綿と受け継がれる(渡辺諒)。日本を賞味しに来たつもりだったのに、ふと気づくと自らがマダム・ピンカートンと化し、日本人の宴会の肴という嗜好対象に祭り上げられていたアンジェラ・カーターの主客転倒劇もある。その裏で、金子光晴やきだみのるといった人々は、フランスから「群を嫌うオットセイ」の反骨精神と徹底した個人主義をも学んだようだ(三浦信孝)。自ら洋行体験はなかったものの、太宰治もこの系譜に位置付けうる、とのディディエ・シッシュの指摘は新鮮だった。処女作『晩年』の冒頭に「選ばれてあることの恍惚と不安ふたつわれにあり」と、堀口大学訳でヴェルレーヌの「叡知」を引いた太宰。かれはボードレールのダンディズムを地で行く作家であり、またヴァレリーの「善をなす場合には、いつも詫びながらしなければいけない。善ほど他人を傷つけるものはないのだから」に、「生まれて御免なさい」のフランス的変奏を味わった。そして神なき極東の島国で、この罪障感が作家を自裁へと導くものだったことは、モーリス・パンゲの『自死の日本史』も教えるところだった。

太宰治と森有正の死を隔つ距離に、相互侵食する日仏文化交渉の認識の厚みが見える。